
鬼

麒麟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼

【Nコード】

N7051A

【作者名】

麒麟

【あらすじ】

新選組総長、山南敬介の切腹前夜の物語。覚悟を決めた山南に土方は・・

（前書き）

新選組の土方主観で書きました。まだまだ全然下手ですが、よろしく
お願いします。(^-^)

「・・・何故、逃げた。」

何故、帰ってきた

「法度に背くとどうなるか、あんたが一番分かってんだろ。」

切腹だぞ

奴は、無言で俺の言葉を聞き続けた。

何も言わず、ただただ目を細め、伸びた背筋をさらに伸ばして。

「言い逃れは、しません。」

迷いはなかった。

その目は確かに、自分の処断を見ていた。

「どうして!??どうして・・・山南さんが切腹なんですか!」

「脱走は法度違反だ。奴も承知している。」

「総司、分かってくれ。これは法度なんだ。今まで何人もの同志を亡くしてきた・・・。山南さんだけ逃れてしまっではなんのんだ。」

「近藤先生まで・・・。じゃあ、山南さんが死んでもいいんですか!??」

沖田の言葉に、近藤は俯いてしまった。

そんな近藤を見て、土方は溜息を吐きながら立ち上がった。

「この話はここまで。介錯は総司がいいと、山南さんは言ってる。」

「そんな・・・できませんよ・・・!」

「頼む、総司。山南さんの希望なんだ。」

近藤が沖田に向かって深々と頭を下げた。

「納得いきませんよ・・・!」

涙声で言いながら、沖田は局長室を出た。

はぁ、と溜息を吐いて、近藤が頭をあげた。

「休んだ方がいいんじゃないのか？」

肩を下げた近藤に、土方は言う。

近藤は力なく首を振った。

「山南さんと話してくる。」

ゆっくりと立ち上がり、近藤は部屋を出た。

それと入れ替わるように、隊士達が次々と入ってくる。

みな泣きながら、土方にすがりついた。

「副長お願いします！！山南総長を助けてください！！」

「それはできん。」

「副長！！！！」

「お願いします！！」

涙を流しながら懇願する隊士達を見て、土方は部屋を出ながら言った。

「だったら、代わりにお前らが腹を切るか。」

「え……。」

「総長を助けたいんだろう?」

「それは……。」

一斉に静かになった彼等を一瞥して、土方は眉間にしわを寄せた。

「……いいか、総長はもう腹を決めている。これは隊規だ。今更変えるなんてできねえんだよ。」

それだけを吐き捨てるように言うと、土方は廊下を静かに歩いて行った。

その後ろ姿を見ながら、隊士達は一斉に泣き崩れる。

「どうして山南先生が……!」

「副長は何故あんなに冷静なんだ!?そこまで総長が嫌いなのか?」

「あの人は鬼だ……。同志が死んでも、あの人はいつも、眉一つ動かさずに切腹の様子を見ているんだ!」

山南のいる部屋の前に来る。中は静かで、近藤はすでにいないようだ。

障子に手をかけ、スツとひくと、先ほどと何等変わりなく、山南はそこに座っていた。

山南は土方に気がつくと、頭を軽く下げ会釈をした。入口に立ってまゝ、土方は口を開いた。

「気分は、どうだ。」

「・・・なんだか、穏やかな気持ちです。不思議なものですね。今の私は、ここに戻ってきてよかったとさえ思っている。」

「理由は、言わないのか。」

「・・・土方君。」

「・・・なんだ。」

「あなたは近藤さんのために尽くしてきた。鬼にまでなって、この新選組を支えた。」

山南は微笑みながら続ける。

「あの方は、真の武士です。しかし、気付いていないかもしれないが、あなたも、立派な武士だと私は思うのです。」

土方は自嘲気味に笑った。

自分のことを構ったことなど、一度もなかった。仲間が死んでいくのも、隊の為と思えば辛くなかった。それを、武士だとこの男は言うのか。

「近藤さんに、そしてあなたに、……出会えて良かった。」

あまりに真っ直ぐな瞳に、俺は心を読まれた気分になる。

たまらなくて、部屋を出た。

俺は鬼だ。

修羅になったのだ。

誰に恨まれようと、近藤さんの為なら喜んで鬼でいた。

鬼ではないと、いけないのだ。

戸の向こうにいる山南に、土方は言った。

「山南さん、俺はあんたが嫌いだった。」

「あんたはいつも、冷静で、聡明で、・・・慕われていた。」

「俺とは全く逆の野郎だった。」

「だから、多分・・・羨ましかったのかもな、あんたが。」

返事は聞こえない。

きつとあの余裕の微笑で、俺の柄じゃない言葉を聞いているんだろう。

「・・・おやすみ。」

元治2年2月22日

ある冬の夜のことだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7051a/>

鬼

2010年10月9日03時51分発行